

復刻 歴世風俗印画集

— 写真でみる装いの文化史 —



はじめに

本書は、風俗史研究者である江馬務（えま たくむ）（一八八四―一九七九）が果たした社会的役割と彼の学問の形成過程を知る上で特に重要と考えられる資料について紹介し、その真価を江湖に問うものである。

江馬は実証的研究によって日本風俗史を体系化した人物として知られる。その研究範囲は幅広く、古代から現代に至る風俗慣習、祭礼、有職故実、結髪、化粧、染織、衣食住など多岐にわたる。彼の研究成果の大半は『江馬務著作集』全一二巻・別巻一卷（中央公論社、一九七五―八二年）に結実しており、それは今日まで高く評価されている。しかし、彼が自身の研究成果を社会に還元する方途としておこなってきたさまざまな活動については正当な評価がなされているとは言いがたい。すなわち、彼が研究者であると同時に九二歳まで教鞭をふるった教育者でもあったこと、京都画壇を担う画家たちの創作活動に寄与してきたこと、映画の時代風俗考証にかかるブレインとされたこと、杜寺における祭礼や年中行事の考案または指導に力を注いできたこと、雑誌の編集をはじめ研究会や学会の企画運営に努めてきたことなどは今日においてあまり知られていない。今あらためて江馬が果たした社会的役割の意義を世に問う理由は、彼の残したものが現代あるいは未来において新たな価値を創造し得る可能性を秘めていると考えるからである。

本書に収録する資料は、江馬が主宰した風俗研究会によって刊行された『歴世風俗印画集』と彼の日記や随筆等自筆原本である。それらを本書では二部構成にして紹介したい。

第一部に収録する『歴世風俗印画集』（二四冊）は、一九二四年（大正一三）四月から一九二六年（大正一五）三月にかけて風俗研究会が発行した月刊誌である。発行部数が極めて少なかったこともあり、現在において本誌は国立国会図書館をはじめ公立図書館等に所蔵されておらず、その存在はほとんど世に知られていない。なお、江馬務旧蔵の風俗史関係資料の大半は京都府（京都府京都文化博物館管理）と花園大学歴史博物館に分散して所蔵されているが、いずれのコレクションにも本誌は含まれていない。筆者は江馬や風俗研究会の活動について調査研究を進める中でその文化的価値を知り、本誌を古書店から入手した。それは第二編第四輯の一部が欠損していたものの、今回の復刻版刊行にあたりほかに本誌を所有する機関や個人に当

たることができなかつたため、筆者の手元にあるものを底本とした。

第二部に収録する「卅三年度江馬年中日記」、「富士乃山苞」、「文科大学史学科三年史論」は江馬の自筆による冊子体資料である。いずれも花園大学歴史博物館の所蔵品である。

これらは二〇一二年（平成二四）に同館が開催した企画展「風俗史家 江馬務の見た明治・大正・昭和」で展示されており、そのうち「卅三年度江馬年中日記」と「文科大学史学科三年史論」については同館が刊行した『花園大学歴史博物館資料叢書』第三輯の中で紹介されている。当時、同館研究員であった筆者はいずれの業務にも携わっており、これらの資料が江馬の学問形成において重要なものであると認識している。そこであらためて解説文や翻刻文を見直し、万全を期して本書に収録することにした。

「富士乃山苞」は、江馬が京都府立第一中学校四年生であった一九〇一年（明治三四）八月八日に富士登山をした際の紀行文である。これはすでに『江馬務著作集』付録に収録されて世に出ている。しかし、原本が全一話で構成されているのに対し、著作集では八話までしか紹介されておらず、これまで全貌が明らかでなかった。そこで本書では全編を収録して紹介することにした。

現在、花園大学歴史博物館が所蔵する江馬務旧蔵資料は、江馬の弟子にあたる野上俊子氏と山名邦和氏を介して、江馬の遺族から同館に寄附されたものである。寄附に先立って二〇〇九年（平成二一）に当時同館館長であった芳井敬郎（一九四七—二〇二一）と花園大学文学部文化遺産学科准教授であった明珍健二とともに筆者は江馬家を訪ねて資料調査を行い、二〇一二年に博物館資料として寄附を受け入れた経緯がある。同館に寄附の相談が寄せられた理由は、芳井が日本風俗史学会において江馬の薫陶を受け、学会運営等を通じて野上氏や務の妻すま子氏と懇意であったことが関係するようである。

江馬が研究のために蒐集した書籍や服飾品等の実物資料は、二〇〇二年（平成一四）に彼の遺族が京都府へ寄贈している。花園大学歴史博物館に寄附されたものは江馬の日記や自筆原稿、家族写真や時代風俗扮装姿のモデルを撮影したガラス乾板、書簡や蔵書等である。それらは膨大な量であり、未だに整理は完了していない。とりわけ江馬の自筆原稿は、彼が一〇代の頃に執筆したことから晩年の未定稿までが残っており、江馬風俗史学の形成過程を知る上で重要な資料となり得るものである。

しかし、当該資料群の価値はそれに留まるものではない。明治・大正・昭和という激動の時代を生きた彼は、目まぐるしく移り変わる京都の暮らしを目の当たりにしてきたはずである。青少年時代には日清・日露戦争後の社会情勢や国民文化が創出されたり地域社会が改革されたりしてゆく歴史の転換期に直面したはずである。それらの影響については計り知れないが、彼は「風俗」というフィルターを通して世の中のさまざまなできごとにまなざしを向けてきた。当該資料群には彼の経験や思想に基づく大いなる知見が秘められていることであろう。私たちは彼が残した知的遺産から何を得て何を創造することができるのか。それには前提として彼の知的遺産へのアクセスビリティが確保されていなければならない。本書の刊行はそのような意義をもつものである。

その意味において、本書では花園大学歴史博物館が所蔵する江馬務旧蔵資料のうち自筆原稿等資料に関する目録と簡易な解題を収録することにした。

本書の刊行にあたり、小林幸子氏、明珍健二氏、花園大学文学部教授の福島恒徳氏、花園大学歴史博物館研究員であり妙心寺派宗務本所特別研究員の志水一行氏、同館研究員の江藤弥生氏には多大なる御協力を賜った。この場を借りて感謝の意を表したい。

また、昨年刊行された『復刻 歴代風俗写真集』に続いて、本書の企画を提案し、刊行まで筆者を導いて下さった日外アソシエーツ株式会社の青木竜馬氏にも御礼申し上げたい。

最後に、江馬務旧蔵資料の重要性を筆者に説き続け、このたびは夢枕に立って筆者を導いてくれた、わが師 芳井敬郎に本書を捧げたい。

二〇二四年五月

青江 智洋

目次

はじめに……………(3)

凡例……………(8)

第一部 歴世風俗印画集

解説(青江智洋)……………3

第一編第一輯	一、久米舞の風俗……………10
第一編第二輯	二、白拍子の風俗……………14
第一編第三輯	三、武人大鎧着用の風俗……………20
第一編第四輯	四、元禄婦人風俗……………25
第一編第五輯	五、江戸時代武家大礼装(直垂)……………32
第一編第六輯	六、切支丹風俗……………36
第一編第七輯	七、官幣大社石清水八幡宮男神像……………42
第一編第八輯	八、室町時代職人風俗……………44
第一編第九輯	九、現代支那婦人風俗……………52
第一編第十輯	一〇、化政時代七夕祭と町娘風俗……………58
第一編第十一輯	一一、大山祇神社蔵紺糸威大鎧……………66
第一編第十二輯	一二、慶長の武士と遊女風俗……………69
第一編第十三輯	一三、藤原時代公卿直衣姿……………74
第一編第十四輯	一四、大原女の正装……………78

第一編第九輯	一五、江戸武家礼装素襖……………82
第一編第十輯	一六、江戸化政時代の内儀姿……………85
第一編第十一輯	一七、正月の門附……………92
第一編第十二輯	一八、大和萬歳……………102
第一編第十三輯	一九、中世少女外出姿……………108
第一編第十四輯	二〇、江戸時代末季履物のかずかず……………111
第二編第一輯	一、小忌衣着用の公卿風俗……………118
第二編第二輯	二、江戸季世御殿女中の姿……………121
第二編第三輯	三、寛政頃の美人冬ごもりと外出姿……………126
第二編第四輯	四、鎌倉時代姫君外出姿……………134
第二編第五輯	五、江戸文政頃の旅姿……………138
第二編第六輯	六、享保頃の町人と当時の遊女……………141
第二編第七輯	七、天台宗の法服風俗……………144
第二編第八輯	八、安永時代の納涼娘風俗……………152
第二編第九輯	九、上古武装……………158
第二編第十輯	一〇、文化頃の新婦姿……………162
第二編第十一輯	一一、朝鮮男女風俗……………166
第二編第十二輯	一二、島原太夫の風俗……………174
第二編第十三輯	一三、傀儡師……………184
第二編第十四輯	一四、手鞠……………185
第二編第十五輯	一五、能楽風俗(高砂)……………192
第二編第十六輯	一六、名妓吉野太夫所持蟹の盃台……………196
第二編第十七輯	一七、雛祭風俗……………200

補足説明(青江智洋)……………207

写真一覽……………216

第二部 江馬務研究

卅三年度江馬年中日記	解説(青江智洋)……………227
卅三年度江馬年中日記	(江馬務)……………235
卅三年度江馬年中日記	翻刻……………277
卅三年度江馬年中日記	補足説明(青江智洋)……………301
富士乃山苞	解説(青江智洋)……………304
富士乃山苞	(江馬務)……………307
富士乃山苞	翻刻……………383
文科大学史学科三年史論	解説(青江智洋)……………420
文科大学史学科三年史論	(江馬務)……………425
文科大学史学科三年史論	翻刻……………449
江馬務自筆資料目録・解題	……………465
江馬務略年譜	……………478

凡例

一 本書の内容

本書は二部構成であり、第一部は一九二四年（大正一三）四月から一九二六年（大正一五）三月にかけて風俗研究会が刊行した『歴世風俗印画集』第一編第一〜一二輯から第二編第一〜一二輯（計二四冊）を収録している。底本には編者所蔵品を使用した。ただし、第二編第四輯は一部欠損している。第二部は花園大学歴史博物館が所蔵する江馬務の自筆本である「卅三年度江馬年中日記」、「富士乃山苞」、「文科大学史学科三年史論」を収録している。

二 本書の構成

- (一) 本書では底本をB5版一冊に改めた。
- (二) 本書第二部に収録する「卅三年度江馬年中日記」、「富士乃山苞」、「文科大学史学科三年史論」は花園大学歴史博物館から提供を受けた画像を使用している。翻刻文との対比の便をはかるために頁をへゝに付した。なお、当該画像（写真）は同館職員が撮影したものである。同館より提供を受けた画像のうち編者解説文に使用した写真には花園大学歴史博物館所蔵とクレジットを付した。
- (三) 「卅三年度江馬年中日記」と「文科大学史学科三年史論」の翻刻文は、『花園大学歴史博物館資料叢書』第三輯（花園大学歴史博物館、二〇一二年）に掲載されたものを参考に編者が誤字等について加筆修正を加えたものである。「富士乃山苞」の翻刻は編者に拠るものである。
- (四) 「江馬務自筆資料目録・解題」は、花園大学歴史博物館の協力を得て編者が作成した。
- (五) 「江馬務略年譜」の作成にあたっては、「江馬務自作年譜」（花園大学歴史博物館所蔵）と中村太郎「江馬務年譜」（『江馬務著作集』別巻収録）等を参考にした。なお、本年譜は編者の判断により本書に関連する項目を中心に抜き出して作成した略年譜であるため、江馬務の業績を網羅したものではない。
- (六) 本書に収録した資料の中には現在において差別的な用語や表現が含まれている。しかし、歴史的事実を正確に認識する意味から、そのままの形で掲載したものであり、これらの差別を容認するものではない。

三 翻刻文の表記等

- (七) 年号表記は、原則として明治五年以前は「和暦年（西暦）」、明治六年以降の場合は「西暦年（和暦）」の順とした。
- (一) 人名や地名などの固有名詞は原文の字体を尊重したが、それ以外の旧字体は新字体に直し、常用漢字を使用して翻刻をした。異体字・略字・古字・俗字はなるべく使用しないこととした。
- (二) 原文の中で判読し難い文字がある場合はその箇所を□で示し、字数が不明の場合は「 」で表示した。また、原文の文字に打ち消し（あるいは見せ消し）がなされている部分については削除した。文意の通じない箇所は（ママ）、推定できるものは（ ）、なお疑問が残るものは（ カ）とそれぞれ右傍に注記した。
- (三) 改行は原文に準じたが、原本の判型や挿絵の配置による行の折り返しは追い込みとした。

三、寛政頃の美人冬ごもりと外出姿

本印画は江戸時代寛政頃の美人の冬ごもりと小雪の霏々たる中を道ゆく姿である。冬ごもりは圍ひ者のだらしない生活を寫したので、鬚は投島田鬚である。此の頃は、髮先が膨大して、後世の形に近遜してゐる。この島田の中央が少しく凹んでゐて一が稍下つてゐる所に江戸の粹を出してゐる。鬚は膨らした燈籠びん。鬘は上つて高い。髮飾としては鼈甲の町形の櫛と流行の松葉簪である。衣服は薄紫の縮緬に麻葉の鹿子文様、紅のしごき帯、炬燵に暖を取つて意中の人を待ちつゝ、古本を讀む。衣箱には小袖をだらしなく二枚掛けてゐる。枕上に市松文様に梅の文様の枕屏風を置き行燈は角行燈、烟草盆に薰香の匂ひたえなるあこた香爐、すべてこれ江戸時代の艶めかしい風情を示してゐる。

外出姿は頭巾は黒縮緬無地のお高祖頭巾で、形は袖の形をしてゐる。小袖は紋付壁縮緬紫地、裾には松竹梅に雪輪の染文様、裏には花菱の縫を境として引返しとなつてゐる。かく衣服裏に文様をつけることは、表の文様の華美を壓迫された結果起つた所で、尾上菊五郎の妻の創意に係る。帯は花色厚板段織文様を平十郎緒に結んで、下には抱帯をしてゐる。下駄は疊打黒塗吾妻下駄、傘を持つ風情は艶に美しい。

風俗は天明頃には極めて華美に流れたが、それでも江戸初期の如き豪宕雄大なる所は全く廢れて、髮風衣服も部分的纖麗に流れ、落ちついた柔かみを豊かに漂はしてゐる所が後期の特徴といつて差支ない。即ち明治の風俗の基礎をなす所である。

因みに本扮装をなすに當り髮は本會結髮師長谷川岩子氏を煩はし、麻葉の衣裳と帯は名譽會員野村正治郎氏に屏風と香爐・烟草盆は會員河村源三郎氏に、角行燈は會員研究員濱口左川氏に、衣箱は幹事井上豊三氏に、下

駄は會友能勢丑三氏に借用し、裾文様の衣服、頭巾は本會藏、その他の衣裳は私の藏である。今恩借の方々へ謹謝する。



江戸時代寛政頃の美人の冬ごもり 座り姿・前



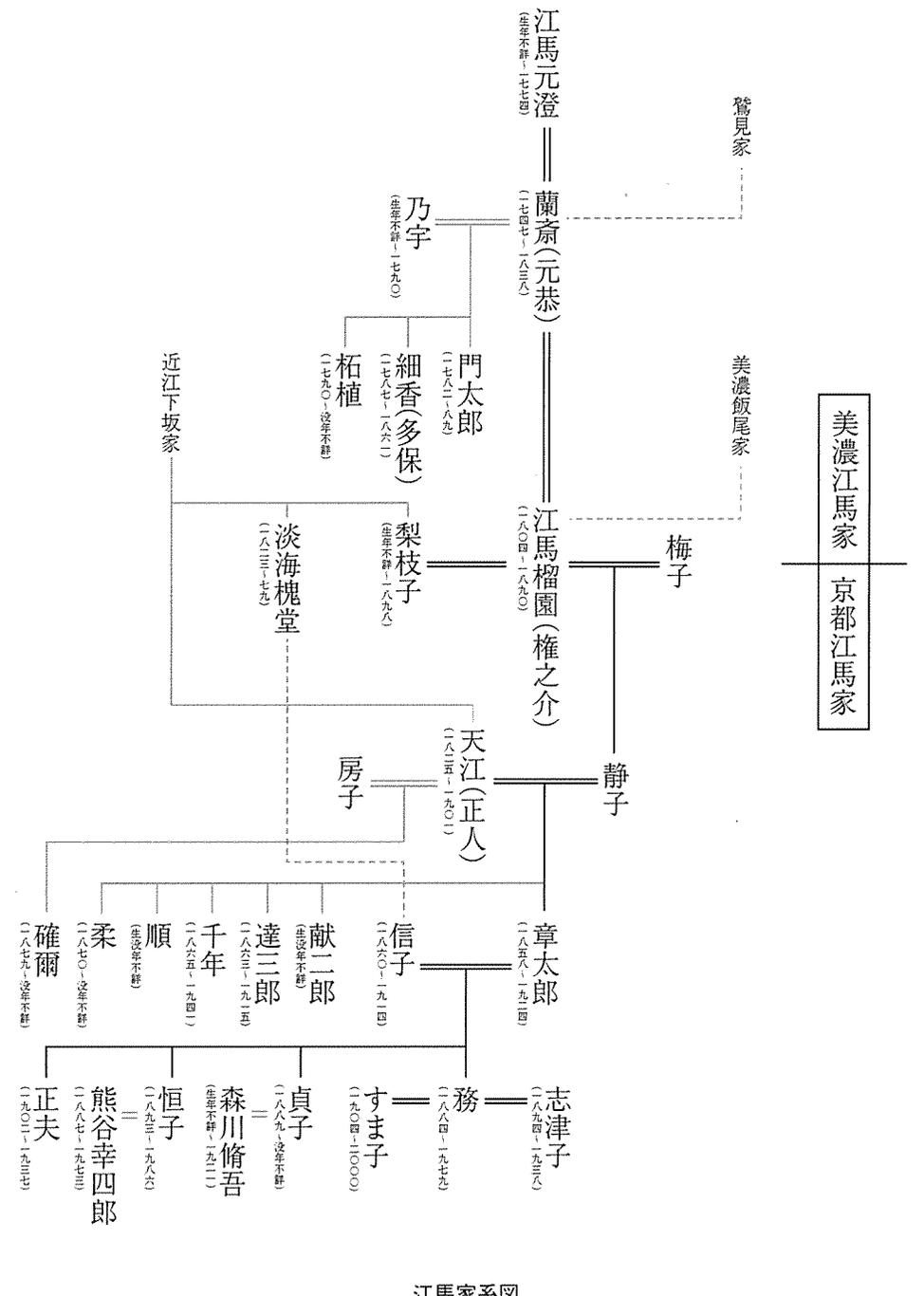
江戸時代寛政頃の美人の冬の外出 立ち姿・前

『冊三年度江馬年中日記』解説

本書は、一九〇〇年（明治三三）一月一日から三月末日にかけて江馬務（以下、務と略称）がつけた日記である。当時の務は一七歳（数え年）であり、京都府第一中学校の二年生であった。彼が日記の冒頭に示した凡例によると、本書は江馬家における日々の所業を書き残し、家族で供覧して内省を促すものであるという。したがって本書の内容は家庭のできごとが中心となっている。しかし、その行間からは近代京都における生活文化の諸相を読み取ることもできるだろう。この点において本書は文化的価値を秘めた地域史料として江湖に問われる意義がある。ただし、史料として読む場合には、当該日記が務の主観によって書かれた記録であることや読み手を意識した書き物であることに留意する必要があるだろう。ちなみに本書に描かれている挿絵も務によるものである。本書の寸法は二四〇×一六三（㎜）であり、頁数は全四〇頁である。

本書を解説するにあたり、まずは江馬家の家族構成について概観しておきたい。

務は京都江馬家の四代目にあたる。京都江馬家は美濃国（岐阜県）大垣藩主の侍医を務めた美濃江馬家（初代元澄）の分流であり、務の曾祖父にあたる榴園（権之助・一八〇四〜九〇）が初代となる。榴園は美濃蘭学の祖と称された江馬蘭斎のもとで医学を修めて養子となり、天保五年（一九三四）に京都へ出て医業に就き、同一五年（一八四四）より仁和寺宮嘉彰親王（小松宮彰仁親王）の侍医を務めた人物である。榴園の養嗣子となったのが務の祖父にあたる天江（正人・一八二五〜一九〇二）である。天江は近江国坂田郡下坂中村（現滋賀県長浜市）の下坂家に生まれ、緒方洪庵に蘭医学、漢詩人である梁川星巖に詩文を学び、後に医業からは離れて詩作に興ずる文人生活を送ったことで知られる。榴園の後継者として医業を受け継ぐことになったのは天江の長男章太郎（一八五八〜一九二四）である。章太郎は一八七七年（明治一〇）に東京の済生学舎へ入学、順天堂病院で研鑽を積んだ後、一八八一年（明治一四）に帰京して自宅に設けた診療所を継いだ。当該日記が書かれた頃は京都府立医学専門学校（現府立医科大学）の教諭も兼任していた。その妻信子（一八六〇〜一九一四）は幕末の勤王家淡海槐堂（一八二三〜七九）の娘であり、日本赤十字社篤志看護婦人会の京都支部幹事として日露戦争時には看護活動に携わった。このふたりの間に長男として生まれたのが務（一八八四〜一九七九）である。



江馬家系図

本家系図は、当該日記に関連する江馬家の親族を中心に作図したものである。

務は一八九一年(明治二四)に開智尋常小学校へ入学し、一八九五年(明治二八)に京都市第二高等小学校を経て一八九八年(明治三一)に京都府尋常中学校(翌年に京都府第一中学校と改称)へ入学している。務の妹として貞子(一八八九〇没年不詳)と恒子(一八九三〇一八九六)がおり、弟として正夫(一九〇二〇一八九三七)がいる。

貞子は京都府立京都第一高等女学校(現京都府立鴨沂高等学校)裁縫科を一九〇七年(明治四〇)に卒業し、一九一三年(大正二)に医学士森川脩吾と結婚。夫婦で京都府加佐郡新舞鶴町(現舞鶴市)に産科病院を開業した。日記が書かれた頃の貞子は一二歳であった。

恒子は京都府立第二高等女学校(現京都府立朱雀高等学校)を卒業後、一九一四年(大正三)に鳩居堂東京支店の支配人であった熊谷幸四郎に嫁いだ。彼女は書家の尾上柴舟や岡山高蔭らに上代様を学び、一九五一年(昭和二六)に日本書道美術院理事となり、一九六五年(昭和四〇)には皇太子妃へ書道を進講する役目を担った。また、一九六七年(昭和四二)に大東文化大学教授となり、晩年まで書道家として門弟の育成に努めている。日記が書かれた頃の恒子は八歳であった。

正夫は当該日記が書かれた頃にはまだ誕生していない。彼は務に代わって医業の道を歩み、京都帝国大学医学部を卒業して、旧満州鉄道が設立した満鉄病院耳鼻科に勤務するも一九三七年(昭和一二)に三五歳の若さで病没している。

続いて、日記に登場する家族以外の人々について簡単にふれておきたい。

八木君こと八木覚三(大橋覚三)は、京都府与謝郡宮津町(現宮津市)の出身であり、江馬家に住み込んで調剤係として働きながら府立医学専門学校に通学する書生である。務は日記の中で彼を八木姓で表記しているが、一方で彼を大橋と呼ぶ場面もある。詳らかではないものの八木姓は父方の姓であり、大橋は母方の姓か養家の姓ではないかと思われる。本書一頁の挿絵に描かれている彼は外套を身にとってズボンに革靴という洋装姿であるが、普段は緋の着物の下にスタンドカラーのシャツを着て袴を穿くという当時定番の書生姿であったものと思われる。一九〇一年(明治三四)に学校を卒業した彼は八年間世話になった江馬家を巣立ち、志願兵となり、日露戦争時には軍医を務め、後に舞鶴市内で診療所を開業している。

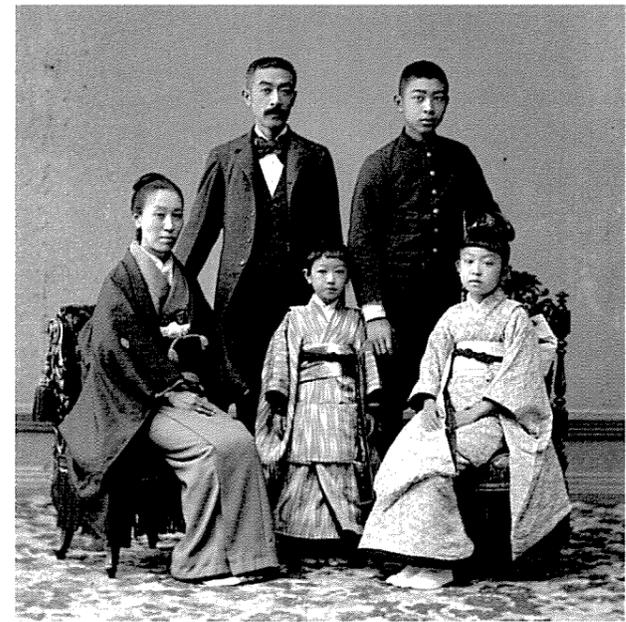
当時の江馬家は住み込みで働く女性を二名雇っていた。一人は炊事や洗濯等の水回りを担当する二〇代半ばの年配者であり、もう一人は家内の掃除や食事の給仕、接客や主人夫妻の身の周りの世話をし行儀作法や家事を習う一八、九歳位の者であった。京都では女中を「おなごし」と呼ぶことが多く、江馬家では前者を「飯焚き」あるいは「黒齒」(下女中)と呼び、後者を「行

次に、日記が書かれた当時の江馬家の暮らしぶりを見てみよう。

江馬家では西洋料理が食膳に上ることもあったが、日常の食事は朝に茶漬けと香のものがつく程度であったという。当時の江馬家では章太郎が勤務を終えて帰宅する夕飯に合わせて飯を炊くのが常であったことから朝は冷飯であり、飯が堅いので熱い茶を入れて茶漬けにしたようである。冬は芋を入れて芋粥にしたり、味噌やネギを入れたりして雑炊にすることもあったという。昼食はこれに一品か二品が加わり、水菜のおひたしに汁というようなものであった。夜も同様に一汁一菜に魚が並ぶと



江馬一族写真 1895年(明治28)撮影
前列向かって左から房子、南城正(南城順の長男)、貞子、梨枝子、天江、信子、
2列目左から渡辺柔、南城順、務、達三郎、3列目左から千年、確爾、章太郎。



家族写真 1899年(明治32)撮影
前列向かって左から信子、恒子、貞子、後列左から章太郎、務。
日記が書かれる前年に撮影された家族写真。

写真：花園大学歴史博物館所蔵

儀見習い」または「白菌(上女中)」と呼んだ。江馬家に奉公する女中は滋賀県(西江州)出身の農家の娘が多く、大体半年から一年程で出替りをするものであったという。江馬家の女中は人が替わっても呼び名は変わらず、代々「まつ(松)」あるいは「まさ」と「きく(菊)」と呼ばれた。本書の挿絵に描かれているように、彼女たちの身なりは日本髪に着物姿が基本であったと思われる。

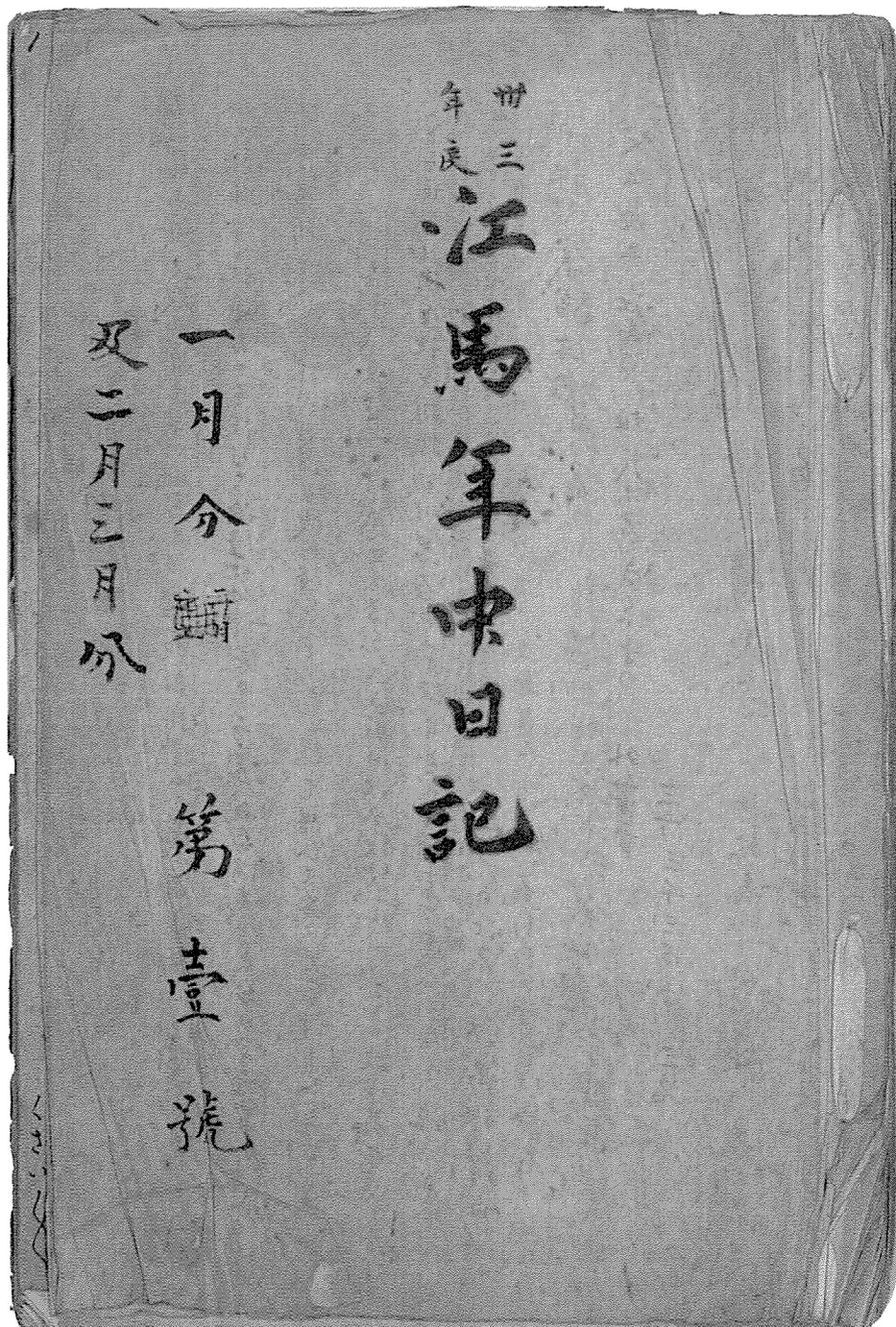
当時の交通機関は人力車が主力であった。往診の際に欠くことのできないものとして江馬家には人力車が置かれ、専属の車夫を雇っていた。日記に登場する「でれ助」こと大橋重吉は江馬家の元車夫である。同様に弥助(杉原弥助)と巳之助(荒木巳之助)も車夫ではないかと思われる。弥助は榴園が仁和寺宮家へ往診する際に駕籠かこかきとして雇われた人物であり、義理堅く武士道精神をもつ者であったことから晩年までなにかと江馬家の世話をしている。彼は務が少年時代にまだちよん髷姿であったという。弥助の妻がおせい(杉原清)である。当時の車夫は丸い饅頭笠をかぶり紺木綿の半纏にパッチという姿が一般的であった。

江馬家の来訪者として登場する「確さん」こと江馬確爾(一八七九〜没年不詳)は天江の末子であり、京都市美術工芸学校(現市立美術工芸高等学校)を卒業して竹内栖鳳に学び、後に西陣織の図案家となった人物である。務にとつては叔父にあたる。同様に伯父にあたるのが淡海弘(一八五六〜一九〇四)である。彼は淡海槐堂の長男であり、信子の兄である。ほかに一月六日に江馬家を来訪している「渡辺の叔母様」は天江の三女柔であり、同月八日に来訪している「南條伯母様」は天江の次女順である。

ちなみに日記には信子が頻繁に長谷川家を訪ねる様子が記されている。それは信子がこの家の者から謡や琴、裏千家茶道を習っていたことによる。したがって長谷川家の者も江馬家をたびたび訪問している。

〈表紙〉

卅三年度江馬年中日記



『卅三年度江馬年中日記』 翻刻

〈表紙〉

卅三年度 江馬年中日記

一月分 第壹号

及二月三分

〈表紙裏〉

凡例

明治卅二年は既に去りて早や卅三年を迎へぬ、年新まると共に諸事新まらざるへからず、
今茲に年中日記なるものを設けて誰彼は勿論善悪なる事、日々の消光、往来等日々の所業を網羅記して余す所なからずは或は
過を改め得ることもあらむ乎。惜ひて益々善を計り悪を避け得ん乎、又閑暇なるトキ一読せば大に愉快を感じる事らん、之れ
日記を設けし所以なり、故に一切取消なることを謝絶し又日記を破損或は墨などにて汚すときは相当の処分をなす、諸君よ念々
奮にて善に心掛られんことを偏に希望す、

日記者 江馬務 謹白

日記賛成者名鑑

父上 母上 江馬貞 恒 八木君、きく、まつ、 外

三万三千三百三十三名

〈1頁〉

江馬年中日記 卅三年度 日記者 江馬務

江馬務略年譜

※本年譜の作成にあたっては、江馬務自作年譜〔花園大学歴史博物館所蔵〕と中村太郎「江馬務年譜」〔江馬務著作集〕別巻収録〕等を参考にした。
 なお、本年譜は編者の判断により本書に関連する項目を抽出して作成した略年譜であるため、江馬務の業績を網羅したものではない。年齢は数え年で表記した。

- 一八八四年(明治一七) 二月一日(戸籍上は二日) 京都市下京区富小路松原上ルに生まれる 一歳
- 一八九一年(明治二四) 四月 開智尋常小学校入学 八歳
- 一八九五年(明治二八) 三月 開智尋常小学校卒業 一二歳
- 一八九八年(明治三一) 四月 下京区高等小学校(京都市第二高等小学校)入学 一五歳
- 三月 京都市第二高等小学校卒業
- 一九〇一年(明治三四) 四月 京都府尋常中学校(後に京都府立第一中学校と改称)入学 一八歳
- 三月 祖父天江逝去
- 八月 富士登山達成
- 一九〇三年(明治三六) 三月 京都府立第一中学校卒業 二〇歳
- 一九〇四年(明治三七) 九月 第三高等学校大学予科第一部(文科)入学 二一歳
- 一九〇七年(明治四〇) 七月 第三高等学校大学予科第一部(文科)卒業 二四歳
- 九月 京都帝国大学文科史学科入学 二七歳
- 一九一〇年(明治四三) 七月 京都帝国大学文科史学科卒業
- 九月 京都帝国大学大学院へ進学
- 一九一一年(明治四四) 四月 京都市立美術工芸学校講師に就任 二八歳
- 一月 風俗研究会発足

- 一九二二年(明治四五) 五月 京都市立絵画専門学校講師に就任 二九歳
- 一月 松本静子と結婚
- 一九一六年(大正五) 三月 『風俗研究』刊行開始 三三歳
- 一〇月 『歴代風俗写真集』刊行開始
- 一九二一年(大正一〇) 四月 京都帝国大学大学院退学 三八歳
- 一九二四年(大正一三) 四月 『歴世風俗印画集』刊行開始 四一歳
- 一〇月 父章太郎逝去
- 一九二八年(昭和三) 一月 京都市立美術工芸学校・同市立絵画専門学校を辞職 四五歳
- 四月 龍谷大学・立命館大学講師に就任
- 五月 京都女子高等専門学校(現京都女子大学)講師に就任 四五歳
- 五月 妻静子逝去 五五歳
- 一九三八年(昭和一三) 四月 京都女子大学教授に就任 六六歳
- 一九四九年(昭和二四) 四月 日本風俗史学会発足(風俗研究会発展的解消)会長に就任 七七歳
- 一九六〇年(昭和三五) 一月 勲四等瑞宝章を受章 妹恒子も勲五等宝冠章を受章 八四歳
- 一九六七年(昭和四二) 三月 京都女子大学を退職 九二歳
- 一九七五年(昭和五〇) 一〇月 『江馬務著作集』刊行開始
- 一九七九年(昭和五四) 五月一〇日 逝去 正五位勲三等瑞宝章を贈られる 九六歳

編者略歴

青江 智洋 (あおえ・ともひろ)

花園大学大学院文学研究科日本史学専攻（修士課程）修了。専攻は日本民俗学。日本風俗史学会会員。花園大学歴史博物館研究員を経て、京都府立山城郷土資料館学芸員となり、現在は京都府立丹後郷土資料館学芸員。

近著として、「江馬務の〈歴史の可視像化〉論—京都画壇と風俗研究会の卒点を論点として」（『人文学報』120号、京都大学人文科学研究所、2023年）、「解説」（『復刻 歴代風俗写真集』日外アソシエーツ、2023年）、「近代京都における農民美術と民芸—副業を奨励した二つの運動」（高木博志編『近代京都と文化—「伝統」の再構築』思文閣出版、2023年）などがある。

復刻 歴世風俗印画集

— 写真でみる装いの文化史

2024年6月25日 第1刷発行

著 者／江馬務

編・解説／青江智洋

発 行 者／山下浩

発 行 行／日外アソシエーツ株式会社

〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 鈴中ビル大森アネックス

電話 (03)3763-5241 (代表) FAX(03)3764-0845

URL <https://www.nichigai.co.jp/>

印刷・製本／株式会社平河工業社

不許複製・禁無断転載

<落丁・乱丁本はお取り替えいたします>

ISBN978-4-8169-3013-3

Printed in Japan, 2024